

第三章 浮舟の物語 浮舟の母、中君に娘の浮舟を託す

[第一段 浮舟の母、中君と談話す]

女君の御前に出で来て(守夫人が御方の御部屋に挨拶に出て来て)、いみじくめでたてまつれば(あまりに三の宮を褒め立て申し上げるので)、田舎びたる(御方は夫人をずいぶん王家様式に不慣れな、田舎じみた人)、と思して*笑ひたまふ(とあって、対応に困り気味に愛想笑いなさいます)。*「笑ひたまふ」は敬語遣いもあり、主語は御方だろうが、この笑いは冷笑だろうか。御方は自分が宇治から二条院に移った時に、自分の田舎臭さを思い知ってずいぶん肩身の狭い思いをしていた(早蕨巻一章五段)。ただ、宇治姫は宇治暮らしだったが、元々が京の宮家生まれなので、王家様式に戸惑いはなく、匂宮の厚情もあって二条院暮らしにも直ぐに馴れたようだ(早蕨巻二章二段、四段)。それでも、匂宮の源氏姫との結婚以来、宇治への逃避願望もあり(宿木巻四章五段他)、とても田舎を侮蔑は出来ないだろう。ただ、王家様式が日常である御方にとって、いちいち感嘆されては平穏な生活が乱される。いくら田舎者に同情できる御方でも真面には対応できず、苦笑して受け流す他は無いのだろう。

「*故上の亡せたまひしほどは(御母上が亡くなった時は)、言ふかひなく幼き御ほどにて(分からないほど幼くいらして)、いかにならせたまはむと(如何お育ちなさるか)、見たてまつる人も(御世話申す乳母たちも)、故宮も思し嘆きしを(亡き御父宮もご心配なさいっていらっしゃいましたが)、こよなき御宿世のほどなりければ(あなた様は生来の御尊運でいらっしゃって)、さる山ふところのなかにも(あのような山暮らしをなさっても)、生ひ出でさせたまひしにこそありけれ(こうして二条院暮らしをなさるように、御成長なさいました)。口惜しく(惜しむらくは)、故姫君のおはしまさずなりにたるこそ(御姉君がお亡くなりになったのが)、飽かぬことなれ(残念です)」 *「こうへ」は注に<以下「飽かぬことなれ」まで、母北の方の詞。「故上」は中君の母上。>とある。

など、うち泣きつつ聞こゆ(などと守夫人は涙がちに申します)。*君もうち泣きたまひて(御方の君も貰い泣きなさいって)、 *「きみ」は貴人に対する敬称だが、御方は世間体上は御部屋様であって、一般語用として貴人と敬われる立場ではなく、あくまで三の宮の御部屋様という、宮の持ち物に対する尊称として<御方>と呼称されるので、この「君」という呼称は守夫人にとって主君筋に当たる人という意味での語用で、即ち守夫人の目線での語りなのだろう。

「*世の中の恨めしく心細き折々も(薄幸の身の上の悔しく心細い数々の経験も)、またかくながらふれば(此処まで生きてみれば)、*すこしも思ひ慰めつべき折もあるを(若君を設けて、少しは生まれた甲斐がある気がする時もあるものの)、いにしへ頼みきこえける蔭どもに後れたてまつりけるは(両親に死に別れ申しますのは)、なかなか世の常に思ひなされて(それでも世の常に思われて)、*見たてまつり知らずなりにければ(母上は御顔も存じ上げないので)、あるを(諦めも着きますが)、なほ*この御ことは(やはり姉君の御逝去は)、尽きせずいみじくこそ(本当に残念です)。大将の(親しかった源右大将が)、よろづのことに心の移らぬよしを愁へつつ(姉君への執着から、他の女の事に興味が持てないと嘆いて)、浅からぬ御心のさまを見るにつけても(深い御気持ちなのを見るにつけても)、いとこそ口惜しけれ(本当に惜しまれます)」 *「世の中」は世情ではあるのだろうが、一般論として世間の冷たさを言う論旨ではないから、此処では自身の生い立ち事情とは即ち<薄幸の身の上>と読んだ方が分かり易い気がする。 *「すこしも思ひ慰めつべき折もあるを」は注に<若宮誕生

などをさす。>とある。従って補語する。*「見たてまつり知らずなりにければ」は挿入句というよりは、本来は「なかなか」の前に置かれるべきものが倒置されているのだろう。こうした言い忘れたのを付け足す、みたいなことは実際の会話では良く有る事で、また実際の会話では間の取り方や節句の緩急などで意味が分かり易いが、此处ではそれをそのまま文にした趣きに見えて、そうなると、写本ではおそらく流し書きされて、此处にある読点校訂も無いのだろうから、そのままでは非常に分かり難い文になりそうだ。が、特に注も無いから、それほど難文でもなかったのだろうか。*「この御こと」は注に<姉大君の死去をさす。>とある。会話なのだから、守夫人の発言を受けて「故姫君」の話題を「この」と近称するのは分かり易い。

とのたまへば(と仰ると)、

「大将殿は、さばかり世にためしなきまで(大将殿はあのように他に例が無いほど)、帝の*かしづき思したなるに(帝が婿として大事になさるので)、心おごりしたまふらむかし(慢心していらっしゃるのではないのでしょうか)。*おはしまさましかば(姉君が御存命だとして)、なほこのこと(やはり内親王との御結婚は)、*せかれしもしたまはざらましや(思い止まりはなさらなかったのではありませんか)」 *「かしづく」は<大事に世話する>で、多くは親が子供を大事に育てる時に語用されるので、此处では<婿として大事にする>という意味になるのだろう。*「おはしまさましかば」は注に<大君が生きていらっしゃったら。「一ましや」反実仮想の構文。大君が亡くなられたので、女二宮の降嫁が行われた、の意。>とある。注意したいのは、「ましかば～まし」の仮想構文に於ける条件項成句助詞「ば」の言い換えだ。この接続助詞は順接も逆接もする論理語で、条件項自体で順接の<～であったら>や逆接の<～であっても>とまでは言っていないようだ。文末まで読めば、この文では逆接の文意と分かるので、「ましかば」を<～であっても>と言い換えるのは分かり易いが、会話文では特に、話している段階で変ではない言い方になっていなければならないので、「ましかば」と言った時点で逆説を示してしまうのは古語構文に反する。だから此处では、順逆を保留した<～だとして>という言い方が良さそうだ。*「せかれ」は、「塞く・堰く(せく、堰き止める・中止する)」のカ行四段活用未然形「せか」に、作動傾向を示す助動詞「る」がついた「せかる」という語、のラ行下二段活用連用名詞で<中止するようになること>という意味らしい。

など聞こゆ(など守夫人は申します)。

「いさや(そうですねえ)、*やうのものと(姉君も私と同様に部屋住みとなって)、人笑はれなる心地せましも(王家の名を汚し、笑い者の気分になるのも)、なかなかやあらまし(却って不本意なことでしょう)。*見果てぬにつけて(結婚に至らなかったの)、心にくくもある世にこそ(心残りがある仲だ)、と思へど(と姉君のことを思うにしても)、かの君は(あの大将君は)、いかなるにかあらむ(如何した訳か)、あやしきまでもの忘れせず(奇妙なほど姉君を忘れずに)、故宮の御後の世をさへ(亡き父宮の追善供養まで)、思ひやり深く後見ありきたまふめる(熱心に御世話くださるようなのです)」 *「やうのもの」は<同様・同類のもの>をいう言い方らしい。注には<姉妹ともに同じ境遇になろう、の意。姉大君は帝の女二宮が、自分中君は夕霧の六の君が、それぞれ正妻として迎えられ、側室の立場となる。>とある。*「見果てぬにつけて」は注に<主語は大君。途中で亡くなった意。>とある。が、だとすると敬語無しに違和感がある。「心にくくもある世にこそ」と思うのは「かの君」のようだから、是も薫君が主語でいいんじゃないのか。私は取り敢えずそう読んで置く。「見」は此处では<結婚>だろう。

など(などと御方は)、*心うつくしう語りたまふ(素直に大将に謝意を表してお話しなさいます)。 *「こころうつくし」は<素直だ>という形容詞らしいが、対象は大将への感謝なのだろう。

「かの過ぎにし御代はりに尋ねて見むと(その亡くなった姉君の身代わりに探して面倒を見ようと)、この数ならぬ人をさへなむ(高家ではない私の娘のことまで)、かの弁の尼君にはのたまひける(あの弁の尼君に大将殿は仰いました)。さもやと(それでは早速にと)、思うたまへ*寄るべきことにははべらねど(身の程知らずにも存じ上げ、お受けできるお話しではございませんが)、*一本ゆゑにこそはと(八宮の血を引く者であればこそと)、かたじけなけれど(もったいないことですが)、あはれになむ思うたまへらるる*御心深さなる(有難く存じられる大将殿の姉君への情け深さです)」 *「寄る」は<近付く、寄り集まる>でもあるが<従う>とも古語辞典にある。此处では、申し入れの話に従う、ということだから、話を受け入れる、ということだろう。 *「ひともとゆゑに」の言い回しは、注に<『異本紫明抄』は「紫のひともとゆゑに武蔵野の草は見ながらあはれとぞ思ふ」(古今集雑上、八六七、読人しらず)を指摘。>とある。 *「みこころふかさ」は<薫殿の宇治姉君への執着>を言うのだろう。薫殿の一般世評は女に淡泊ということらしいし、守夫人もそう思っているようなので、一般論として薫殿の愛情深さを言っているとは思えない。

など言ふついでに(などを守夫人は言いながら)、この君をもてわづらふこと(此处に来ている娘の縁談に難儀していることを)、泣く泣く語る(泣く泣く御方に相談申します)。

[第二段 浮舟の母、娘の不運を訴える]

こまかにはあらねど(詳しくではないが)、人も聞きけりと思ふに(二条院の女房もある程度の事情は聞き知っていると思うので)、少将の思ひあなづりけるさまなどほのめかして(守夫人は少将が娘を父無し児と侮って結婚話を変えたことなどを仄めかして)、

「命はべらむ限りは(私が生きている内は)、何か(何とか)、朝夕の慰めぐさにて見過ぐしつべし(娘を日々の張り合いとして面倒見て暮らせましょう)。うち捨てはべりなむのちは(が、先立ちました後は)、思はずなるさまに散りぼひはべらむが悲しさに(思い掛けない不幸な目に遭って落ちぶれさせてしまうのが厭なので)、尼になして、深き山にやし据ゑて、さる方に世の中を思ひ絶えてはべらましなどなむ(尼にさせて深い山に住まわせて修行生活で俗世を思い絶った方が良いでしょうかなど)、思うたまへわびては(思いあぐねましては)、思ひ寄りはべる(考え至っております)」

など言ふ(などと御方に申します)。

「げに(仰るように)、心苦しき御ありさまにこそはあなれど(お嬢様はお気の毒な御事情ではあるでしょうが)、何か(何というか)、人にあなづらるる御ありさまは(世間から軽んじられるという御事情は)、かやうになりぬる人のさがにこそ(父無し児となった者の宿命です)。さりとても(だからと言って)、*堪へぬわざなりければ(世に背くは、若い身空に相応しくないことなので)、*むげにその方に*思ひおきてたまへりし身だに(亡き父宮が強くそのようにお考えになっ

私と違って、お嬢様にはあなた様がいらっしゃるのだから、出家などあるまじき為さりようです)。*やついたまはむも(剃髪姿に身をやつしなさるにも)、いとほしげなる御さまにこそ(お嬢様はおいたわしいほど美しい御器量です)」 *「堪ふ(たふ)」は<耐える。抵抗し得る。持ち堪える。>という語用が多いが、一定の価値観に<見合う。適う。>という意味もあって<適合=相応しい>とも見做せるかと思う。 *「むげにその方に」は注に<山住みの生活をさす。>とある。 *「思ひおきてたまへりし」は注に<主語は父八の宮。>とある。 *「やついたまはむ」は注に<髪を落とすこと、出家することをいう。>とある。

など(などと御方が)、いと大人びてのたまへば(とてもお姉さんぶって仰るので)、母君、いとうれしと思ひたり(母君の守夫人は、その親身さをとても嬉しく思いました)。ねびにたるさまなれど(守夫人は年老いてはいたが)、よしなからぬさましてきよげなり(品もあって小奇麗にしていました)。いたく肥え過ぎにたるなむ(ただひどく肥え過ぎているところが)、*常陸殿とは見えける(いかにも一国一城の主として日々誰憚ることのない生活で、嗜みに欠ける嫌いのある受領家の奥方然とした、常陸殿とは見えませんでした)。 *「ひたちどの」は注に<『集成』は「いかにも田舎者の受領の妻といった風情、と茶化した草子地」と注す。>とある。従って補語する。

「故宮の(亡き八宮が)、つらう情けなく思し放ちたりしに(冷たくも認知して下さらなかったので)、いとど人げなく(娘はただ父親に死に別れたという以上に立場が無く)、人にもあなづられたまふと見たまふれど(言い寄った男にも見くびられなさるものと存じますが)、かう聞こえさせ御覽ぜらるるにつけてなむ(このようにご相談申し、御心配頂ければ)、いにしへの憂さも慰みはべる(今までの苦労も報われます)」

など(など守夫人は)、年ごろの物語(年来の身の上話や)、*浮島のあはれなりしことも聞こえ出づ(歌枕に名高い浮島の実際の風情の印象深さなども、夫の任地に同道した陸奥路の土産話に持ち出しました)。 *「うきしまのあはれ」は注に<『花鳥余情』は「塩釜の前に浮きたる浮島の浮きて思ひのある世なりけり」(古今六帖三、塩釜)を指摘。>とある。「浮島」は<宮城県松島湾の塩竈浦にある島。[歌枕]>と大辞泉にある。常陸守の元の赴任地は陸奥(みちのく)だった。「陸奥国の守の妻になりたりける」と宿木卷七章四段に中将の君として八宮に仕えていた守夫人の紹介談が弁尼から薫君にあった。

「*わが身一つのとのみ(辛い目に遭っても、自分ひとりが悪いのかと思うばかりで)、言ひ合はする人もなき*筑波山のありさまも(相談できる人もいない筑波山麓の寂れた東国の田舎暮らしの様子も)、かくあきらめきこえさせて(このように詳しくお話し申して)、いつも、いとかくてさぶらはまほしく思ひたまへなりはべりぬれど(いつも本当にこのようにあなた様の御側にお仕え申したく存じられ申しますが)、*かしこにはよからぬあやしの者ども(守の家には出来の悪い見苦しい子供たちが)、いかにたち騒ぎ求めはべらむ(私の不在を、どんなにか騒ぎ立てて待っておりますので)、さすがに心あわたたく思ひたまへらるる(さすがに気懸かりに存じます)。かかるほどのありさまに身をやつすは(今のような地方官家に身を置くのは)、口惜しきものになむはべりけると(惜しくてならないと)、身にも思ひ知らるるを(私自身が思い知らされていますので)、この君は(この娘は)、ただ*任せきこえさせて(偏にあなた様にお任せ申して)、*知りはべらじ(私は構わずに居ようと思います)」 *「わが身一つのとのみ」は注に<「大方はわが身一つの憂きからになべての世をもうらみつるかな」(拾遺集恋五、九五三、読人しらず)。『異本紫明抄』は「世の中は昔よりやは憂かりけむわが身一つのためになれるか」(古今集雑下、九四八、読人しらず)を指摘。>とある。拾遺集の「な

べての世をもうらみつるかな(世間全部を恨んでしまう)」よりは、古今集の「世の中は昔よりやは憂かりけむ(男女の仲は元々辛いものなのか)」という問いかけの方が、此処の文意に合っているように見える。 *「つくばやま」は注に <『紫明抄』は「筑波山端山繁山繁けれど思ひ入るには障らざりけり」(重之集)を指摘。ここは常陸国の歌枕として引用。>とある。何処かに「言ひ合はする人もなき筑波山」の筋で詠んだ歌があったとしても、「筑波山のありさま」で<常陸暮らし>と言っていることに変わりはないだろう。 *「かしこにはよからぬあやしの者ども」は注に<自邸の常陸介との間にできた娘たち。>とある。 *「任せきこえさせて」は、守夫人が娘の結婚を御方の仲介に委ねる、ということであり、それは是までの経緯からして、薫大将との取り成しを依頼する、という事以外の具体意は有り得ない。 *「知る」は<管理する。構う。>という語用。

など(など守夫人は)、かこちきこえかくれば(御方に源氏右大将との縁談を託し申し掛けたので)、「げに(やっぱりこの縁談は)、*見苦しからでもあらなむ(悪い話じゃなさそうだわ)」と見たまふ(とお考えになります)。 *「見苦しからでもあらなむ」は<見苦しいことはないだろう>という言い方だろうが、この形容句の対象は何か。御方が想定している事柄が薫大将と異母妹の結婚であることは間違い無い。として、御方が今更にこの結婚自体を悪くないなどと思うはずも無い。初めから良さそうだと思って御方が薫君に振った話だ。が、そんなことを言ったら、御方にとってこの縁談は全て承知の上の話であり、いくら「げに」と再確認するにしても、今更何を悪くないと思うのか。いや、しかし待てよ。実は、この縁談は、一旦は立ち消えになっていたのだった。それが偶々、左近少将の翻意によって姉君の結婚話が潰えた、という事情なのだった。だから、御方にとっても一度は既に終わった話であった訳だ。肝心の守夫人が姉君の正妻婚を考えているのなら、さすがに御方が出る幕は無い。が、今また、守夫人は大将との縁談を改めて頼みに来たのであり、改めて、ということは姉君の部屋住みを覚悟の上で、守夫人は腹を決めて大将との結婚を相談に来た、ということだ。そういうことなら、御方は御方で、大将と異母妹との結婚には、面倒な大将の言い寄りを避けたい、という切実な思惑が元々あるのだから、この因縁を改めて<悪くない>と思うに十分な理由は確かにあった。ただ、下文との繋がりでは、娘御も母君と一緒に御方の前に座していて、母君から改めて大将との縁談を頼まれたので、御方は娘御を見直してみたところが、この異母妹はなるほど薫大将に不釣り合いなほど劣ってはいない、と思ったように読んだ方が場面の流れも絵面も良さそうだ。が、それでもやはり、上文の「かこちきこえかくれば」を受けた「見たまふ」の文意としては、作者は読者に経緯の再認識を促している気はする。

[第三段 浮舟の母、薫を見て感嘆す]

容貌も心ざまも、え憎むまじうらうたげなり(娘御は顔立ちも表情も素直そうで可愛らしかったのです)。もの恥ちもおどろおどろしからず(自分が話題になっている気恥ずかしさも控え目で)、さまよう見めいたるものから(程良く世間ずれしていないが)、かどなからず(幼稚でもなく)、近くさぶらふ人びとにも(御方の側近女房たちにも)、*いとよく隠れてみたまへり(とても上手く身を隠していらっしやいました)。ものなど言ひたるも(ものの言い方も)、昔の人の御さまに(故姉君の御様子に)、あやしきまでおぼえたてまつりてぞあるや(不思議なほど似ていらっしやるではありませんか)。 *「いとよく隠れてみたまへり」の主語は娘御のようだが、此処では敬語遣いになっている。語り手の視点が母君から御方に移っていることが示されているのだろう。また、娘後が女房たちから身を隠すということの意味は私には分かり難いが、取り敢えずは、軽々に噂をされないように気を配る「かどなからず」の一面なのかと読んで置く。

かの人形求めたまふ人に見せたてまつらばやと(故姉君の身代わりを求めていらっしゃる人にこの娘御を引き合わせ申したいものだ)、うち思ひ出でたまふ折しも(御方が心に思い浮かばせなされた丁度その時に)、

「大将殿参りたまふ(大将殿がお見えになりました)」

と、人聞こゆれば(と侍が知らせ申すので)、例の(いつものように)、御几帳ひきつくろひて、心づかひす(女房たちは廂に御几帳を立てて客間を用意します)。この客人の母君(この客人である母君の守夫人が)、

「いで、見たてまつらむ(是非、大将殿を拝見申したいものです)。ほのかに見たてまつりける人の(少し拝し申した人が)、いみじきものに聞こゆめれど(非常に優れていると申しているようですが)、宮の御ありさまには(宮様の御様子には)、え並びたまはじ(及びなさらないでしょう)」

と言へば、御前にさぶらふ人びと(と言うと、御方の側近女房たちは)、

「いさや、えこそ聞こえ定めね(そうとも言い切れませんよね)」

と聞こえあへり(と申し合っていたので、守夫人は)、

「いかばかりならむ人か(誰が)、宮をば消ちたてまつらむ(宮様をお負かし申せるもんですか)」

など言ふほどに(などを言う内に)、「今ぞ、車より降りたまふなる(今、車からお降りなさるところのようです)」と聞くほど(と女房が言うのを聞く時に)、かしかましきまで追ひののしりて(煩いほど従者が人払いする声はしたが)、とみにも見えたまはず(大将殿は直ぐにはお見えにならず)、*待たれたまふほどに(心待ちに思われなさりながら)、歩み入りたまふさまを見れば(廂の間にお入りなさる姿を見れば)、げに、あなめでた(実に何とも素晴らしく)、*をかしげとも見えぬながらぞ(匂宮がお見せになる寛いだ夫の風情とは見えない威儀ある姿ながらも)、なまめかしうあてにきよげなるや(大将殿の、それは優美で品があり端正なこと)。 *「待たれ」の「れ」は助動詞「る」の連用形で、この「る」は受身を示して、「待たれ」で<待たれるところの>という言い方であり、現代語でも使う語用だ。この「る」に敬語の「たまふ」が付いているので、「待たれたまふ」の主語は薫大将。また、「待つ」は<待ち給ふ>などの敬語遣いが無いので、是は御方ではなく守夫人目線での語りらしい。 *「をかしげとも見えぬ」は注に<『完訳』は「色めかしい風情とも見えぬが、の意か。誠実さを強調するか」と注す。>とある。匂宮の夫が自宅に戻る風情との比較、かと思う。

すずろに見え苦しう*恥づかしくて(守夫人は思わず素顔で会うのが相済まないように気が引けて)、額髪などもひきつくろはれて(額髪なども手直しせずにはいられず)、*心恥づかしげに用意多く(隙の無い立派さで)、*際もなきさまぞしたまへる(大将殿は臣下とは思えないほど王族然としていらっしゃいました)。内裏より参りたまへるなるべし(こうした正規装束の身だしなみからしても、大将殿は御所からの中宮見舞いの帰りでいらっしゃるのだろうか)、*御前どものけはひあまたして(御車付きの従者も大勢居る様子で)、 *「恥づかし」の主語は御方。 *「心恥づかしげ」の目的語は薫大将、だろう。 *「きは」は<身分>だろうが、特に<分際>の語感は<臣下身分>を示し、「際も無し」

はく臣下ではない＝王族だ>という言い方なのだろう。 *「御前」は注に<薫の御前駆。前駆の場合、「御前」は「ごぜん」と読む。>とある。

「昨夜(よべ、昨晚は)、後の宮の悩みたまふよし承りて参りたりしかば(中宮が御不調と承って参内申しましたが)、宮たちのさぶらひたまはざりしかば(宮様方がお見えになっていなかった)、いとほしく見たてまつりて(気懸かりに存じ上げて)、宮の御代はりに今までさぶらひはべりつる(宮様がお見えになるまでの御代わりとして今まで御見舞申しておりました)。今朝もいと*懈怠して参らせたまへるを(今朝も三の宮はとても遅く参内なさいましたが)、あいなう(それは遺憾にも)、*御あやまちに推し量りきこえさせてなむ(あなたの魅力が宮をお引止めなされた罪かと私は推察申しております)」 *「懈怠(けたい)」は<怠慢>。「懈怠して参らせたまへる」は<匂宮が遅参なされた>という悪口で、悪口を面と向かって言うのは、本当に相手を非難する場合の他は、親しさを示す軽口表現だ。 *「おおんあやまち」の「御」は話し相手の御方本人に対する敬称で、「あやまち」は悪口だから是も冗句だが、「あやまち」は御方や若君が宮を引き留めた、というよりは、匂宮が引き留められずにはいられなかったあなたの魅力の所為、という言い方と取って置く。

と聞こえたまへば(と大将殿が申しなさると)、

「げに(それは実に)、*おろかならず(鋭く)、思ひやり深き御用意になむ(十分に相手を思い遣った御配慮ですこと)」 *「おろかならず」は冗句なのだから、親身に<疎かではない＝熟慮ある>と応えたのではなく、嫌味で<愚かではない＝洞察に優れている>と応えたのだろう。

とばかりいらへきこえたまふ(とだけ御方はお応え申しなさいます)。宮は内裏にとまりたまひぬるを見おきて(匂宮が御所にお泊りになるのを見届けて)、ただならずおはしたるなめり(どうしても御方に会いたくて、薫大将は二条院にお越しなされたようです)。

[第四段 中君、薫に浮舟を勧める]

例の(大将はいつものように)、*物語いとなつかしげに聞こえたまふ(取りとめのない話をとても親しげにお話為さいます)。事に触れて(何かにつけて)、ただいにしへの忘れがたく(ただ故姉君が忘れ難く)、世の中のもの憂くなりまさるよしを(世の中がつまらなくなる一方だと)、あらはには言ひなさで(そのように繋げた言い方ではなく)、かすめ愁へたまふ(全体で御方がそう思えるように訴えなさいます)。 *「ものがたり」は何かの話題についての、ある程度まとまった話だろうが、「いとなつかしげに」する事自体が目的のようなもので、特に是という話題ではなく、ざっと世間話の類だろう。

「さしも(そんなにまで)、*いかでか(どうして大将は)、世を経て心に離れずのみはあらむ(故姉君をいつまでも忘れられないだけでいられようか)。なほ(やはり)、*浅からず言ひ初めてしことの筋なれば(深い思いだと最初に言い出した話なので)、名残なからじとにや(忘れていないようにしないと、不誠実に見えて都合が悪いからだろうか)」など(など御方は)、見なしたまへど(勘繰りなさるが)、人の御けしきはしるきものなれば(大将の気落ちした御様子は激しかったので)、見もてゆくままに(暫く見ているうちに)、あはれなる御心ざまを(その御思い入れ様を)、*岩木ならねば(御方は木石ではないのだから)、思ほし知る(お分かりになります)。 *「いかでか」は渋谷訳文は疑問と取り、与謝野訳文は反語と取っているが、下文への繋がりからして、私は与謝野訳文に従いたい。

*「浅からず言ひ初めてしことの筋なれば」は注にく『完訳』は「最初に深い思いを訴えたので、忘れたと思われたくないせいか」と注す。>とある。「ことの筋」は<話の都合上>で、「名残なからじとにや」の「にや」はその<都合に障る=都合が悪い>ことへの懸念なのだろう。話を違えるのは信義に背く。 *「いはきならねば」は注にく『異本紫明抄』は「人は木石に非ず、皆情有り」（白氏文集、李夫人）を指摘。>とある。

*怨みきこえたまふことも多かれば(薫大将は御方が匂宮と一緒にになったことに無念を訴えなされる事も多いので)、いとわりなくうち嘆きて(御方は本当に困って嘆息し)、*かかる御心をやむる禊をせさせたてまつらまほしく思ほすにやあらむ(こうした大将の御未練を断ち切る禊をして頂きたくお思いになったのか)、かの人形のたまひ出でて(かの身代わりに見込まれる異母妹の話を持ち出しなさって)、 *「うらむ」は<嘆く>こと全般を言う場合もあるが、此处では<不平を言う>のだろう。どういう不平か。御方が大将とではなく匂宮と一緒にってしまったことへの、今更ながらの無念さを、あろうことか薫大将は口にしたのだろう。あろうことか、と言うのは、そう仕向けた張本人が薫殿だったから、とんでもない言い掛かりな訳だが、宇治姉君が早世した今となっては、止むに止まれぬ素直な気持ではあったのかも知れない。が、御方にとっては迷惑この上なく、迷惑でしかない。邪険に出来ない後見筋の相手だけに始末が悪い。 *「かかる御心をやむる禊」は注にく『異本紫明抄』は「恋せじとみたらし河にせし禊神はうけずもなりにけるかな」（古今集恋一、五〇一、読人しらず）を指摘。>とある。

「いと忍びてこのわたりになむ(今その人は、ごく内密に当家に滞在しています)」

と、ほのめかしきこえたまふを(と仄めかしなされるのを)、かれもなべての心地はせず(かの大將も平静ではいられず)、ゆかしくなりにたれど(会いたい気になったが)、うちつけにふと移らむ心地はたせず(御方からあっさりとその人に興味が移る気分でもまたありません)。

「いでや、その本尊、願ひ満てたまふべくはこそ尊からめ(さてその本尊が私の願いを叶えて下されば有難いのですが)、*時々(会う度に)、心やましくは(不満が募っては)、なかなか*山水も濁りぬべく(かえって修行になりません)」 *「ときどき」は<まれに、ときたま>ではなく<その都度、いつもその度に>の語用だろう。四月二十日過ぎに大将と常陸女は接遇したが、宿木卷九章は中途半端な話で、その接遇の具体場面は割愛されていて、接遇があったという経緯は示されたものの、その接遇が大将や娘や御方や守夫人にとって如何いう意味だったのか、という肝心の事情が示されておらず、その所為で、この東屋巻を読み進むにも、非常に消化不良感があつたし、今でも大変に読み辛い。その辺の不可解さを探る手掛かりになりそうなのが、この「時々」という語だ。今は、八月末か九月初めあたりだろうか。四月末からは四ヶ月ほど経っている。「時々」の内一つの「時」は四月の接遇を言っているに違いない。もう一つの「時」が今回あるであろう対面かと思われる。ということは、前回の接遇は少なくとも大将殿にとっては「心やまし(不満だ)」だったらしい。当時の守夫人の心境を私なりに勘繰ってみれば、娘には縁談が幾つかあって、分相応な落着き先としては左近少将が候補になりつつあったくらいの時期だろうか、それでも高家の源氏大将と娘の縁を試したくて、娘一人を大将と接遇させるべく宇治へ向かわせた、というところかと思われる。が、薫大将は相変わらず煮え切らない態度で、娘を強引に抱くことはなかった、のだろう。その後も大将に気があるらしいことは弁を通じて守夫人に伝えられたが、母御の守夫人は分不相応な望みはさっさと諦めて、娘には少将との縁談を進めた、ということらしい。で、一旦は、娘と少将との縁談が決まり、その時点で守夫人から、弁を通じて薫殿にも、大輔から御方にも、娘と大将との縁切れは伝えられた筈だ。是で終われば、それだけの話だったのだろうが、娘の少将との縁談が潰えて、大将との縁談が再浮上するととなると、薫殿は四月の「心疚し」を蒸し返さずには居られない、のかもしれない。とはいえ、多分それは客観的には薫殿の方

の消極性こそが問題なのだろうが、薫殿の言い分としては、女が積極的に仕掛けて来ないと性戯ができない、という不満なのだろう。 *「やまみづ」は<山籠りの修行で悟る平穏な心境>だろうか。

とのたまへば(と大将が仰ると)、果て果ては(御方が呆れて)、

「うたての御聖心や(世話の焼ける御修行心ですね)」

と、ほのかに笑ひたまふも(と微笑なさるのも)、をかしう聞こゆ(大将には艶な風情に聞こえます)。

「いで(しかし)、さらば(そういうことなら)、伝へ果てさせたまへかし(その本尊に今度はしっかりと、私の意向を伝え切って下さいね)。この御逃れ言葉こそ(この場限りのあなたの逃げ口上であったなら)、*思ひ出づればゆゆしく(故姉君があなたを身代わりに立てた昔のことが思い出されて、忌々しい)」 *「思ひ出づれば」は故姉君が妹君を身代わりに立てた丸三年前の八月末の日のこと(総角巻二章五段)だろうが、特に注は無い。

とのたまひても(と薫大将は仰るに付けても)、また涙ぐみぬ(また涙ぐみます)。

「見し人の形代ならば身に添へて、恋しき瀬々のなでもものにせむ」(和歌 50-01)

「御清めも そっくりさんで 盛り上がる」(意識 50-01)

*注に<薫の詠歌。「見し人」は故大君。「瀬々」と「なでも」は縁語。>とある。「なでも(撫で物)」は大辞泉に<襖(みそぎ)や祈祷(きとう)の折などに、身代わりに用いる人形(ひとがた)や衣服。それでからだをなでて、災いなどを移したあと水に流す。形代(かたしろ)。>とある。と同時に、「なで」はダ行下二段活用の他動詞「撫づ(なづ、撫でる・可愛がる)」の連用形で、「なでも」は<可愛がるというもの=慰み物>のことでもある。「瀬々(せぜ)」は、一意に<あちこちの水の流れ>であり、もう一意は<折々>のことでもある。したがって当歌は、歌筋自体が理屈立てて<その女が故姉君の身代わりになるに足るなら近くに侍らせて恋しい折々の慰め物にする事で、故人への未練を断ち切る御祓い御度としよう>という大喜利の歌意。「みしひと」「かたしろ」「せぜ」「なでも」などの単語の成り立ちの一端を恋心で解説する趣き、でさえある。

と(と薫大将は)、例の(教科書のような)、戯れに言ひなして(戯れ歌の調子で)、紛らはしたまふ(言い紛らわしなさいます)。

「みそぎ河瀬々に出ださむなでものを、身に添ふ影と誰れか頼まむ (和歌 50-02)

「流し雛 行方知れずの 頼りなさ (意識 50-02)

*注に<中君の返歌。薫の「身に」「瀬々」「なでも」の語句を受けて返す。『完訳』は「「なでも」は水に流すものだから、生涯の伴侶と誰が頼みにしよう、と切り返した歌」と注す。>とある。

*引く手あまたに(古歌に「引く手あまたに」とある大幣帛のように、あなたに群がる女たちは多く居る)、とかや(とか聞いております)。いとほしくぞはべるや(そういう人に異母妹を引き合わ

せ申すのは、気が咎めますねえ)」 *「引く手あまたに」は注に<歌に続けた中君の詞。『源氏積』は「大幣の引く手あまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ」(古今集恋四、七〇六、読人しらず)を指摘。>とある。「大幣(おほぬさ)」は<大祓(おおはらえ)のときに用いる大串につけた、ぬさ。祓(はらえ)のあと、人々がこれを引き寄せて身のけがれをそれに移して、川に流したという。>と大辞泉にある。御祓い繋がりと言ひ回し。「思へどえこそ頼まざりけれ」は<あなたを頼りたいけれど、とても頼り切れない>という恨み節らしい。「古今和歌集の部屋」サイトの当該ページに分かり易い説明があつて助かつたが、続く 707 番にこの返歌があつて、遊び人でも最後に落ち着き先はある、と話が落とされているのは如何にも洒落ていて、此处でも下文にその贈答を踏んだ薫殿の応答があつて、改めて古今集の履修が当時の文化人の必須教養であつた事が偲ばれる。

とのたまへば(と御方が仰ると)、

「*つひに寄る瀬は(私の最後の抛り所は)、さらなりや(言うまでもなく、故君の所縁であるあなたなのに)、いとうれたきやうなる(ずいぶん情けない仰りようだ)。水の泡にも争ひはべるかな(水の泡とも競わねばならない)、*かき流さるるなでもものは(流し放される布帛の身では)。いで、まことぞかし(いや全くだ)。いかで慰むべきことぞ(どう慰めたら良いのだろう)」 *「つひに寄る瀬は」は先に引かれた古今集 706 番歌の返歌である 707 番歌の「おほぬさと名にこそ立てれ流れてもつひに寄る瀬はありてふものを」(在原業平)の四節だ。 *「かき流さるるなでもものは」は最初に例えた<形代=常陸女>から<大幣帛=薫大将>に対象が変わっていて、此处では薫殿は自分が頼りない立場だと嘆いている。

など言ひつつ(など大将が言つては)、暗うなるもうるさければ(日暮れて情緒が増して来るのも不都合なので)、かりそめにもものしたる人も(仮宿を構えている守夫人も)、あやしくと思ふらむもつつましきを(大将との仲を勘繰るかもしれないのを避けたいということで)、

「今宵は、なほ、とく帰りたまひね(今夜はともあれ早くお帰り下さい)」

と(と御方は)、こしらへやりたまふ(大将の帰宅を促しなさいます)。

[第五段 浮舟の母、娘に貴人の婿を願う]

「さらば、その客人に(それではその客人に)、かかる心の願ひ年経ぬるを(私の故君を慕う気持ちは長年に亘るもので)、うちつけになど(異母妹の存在を知った事で思い付いたものなど)、浅う思ひなすまじう(軽く見做さないように)、のたまはせ知らせたまひて(言い聞かせ下さって)、はしたなげなるまじうはこそ(不首尾にならないように、お取り計らい下さい)。いとうひうひしうならひにてはべる身は(こういうことについては、ひどく不慣れなので)、何ごともをこがましきまでなむ(私は全てに不調法なのです)」

と(と薫大将は)、語らひきこえおきて出でたまひぬるに(御方に頼み置いてお帰りになったが)、この母君(母君の守夫人は)、

「いとめでたく(大変に素晴らしい)、思ふやうなるさまかな(理想的な貴人ぶりだ)」

とめでて(と大将を愛でて)、乳母*ゆくりかに思ひよりて(乳母が腹立ち紛れに考え至って)、たびたび言ひしことを(度々口にした大将との縁談を)、あるまじきことに言ひしかど(分不相応で望ましくないと述べていたが)、この御ありさまを見るには(この大将の御姿を目の当たりにして)、 *「ゆくりか」はく思いがけないさま。突然であるさま。>またく軽はずみであるさま。不用意なさま。>と大辞泉にある。此处では、左近少将の俄かの妹君への乗り換えに憤慨した姉君の乳母が、姉君を薫大将に縁付けて少将を見返して遣れば良いと述べていたこと(二章一段)を指しているようなので、身分違いの分別を忘れたく軽率さ>からした乳母の発言とも言えそうだが、私には「ゆくりか」の語感がく成り行き任せ>のように思えて、軽率かどうかという発言内容の評価の前に、発言自体がく感情に任せて=劇高のままに>なされたと言っている、ものと読んで置く。

「天の川を渡りても(天の川を渡って会うという年に一度の逢瀬でも)、*かかる彦星の光をこそ待ちつけさせめ(こうした彦星の栄光を待ち付けさせてこそ、娘の冥利に違いない)。わが娘は、なめならむ人に見せむは惜しげなるさまを(宮様の血を引いたこの娘は並の貴族に娶わせるのは惜しまれる人であったものを)、夷めきたる人をのみ見ならひて(野蛮な東夷ばかりを見慣れた所為で)、少将をかしこきものに思ひける(少将を立派なものに思ってしまった)」を、悔しきまで思ひなりにけり(ことを悔やむほどに思うようになったのです)。 *「かかる彦星の光をこそ待ちつけさせめ」の係り結び文型は、下にくば、宜し>と読んでく望ましい=したい>という文意に取る方が素直にも思えるが、彦星の例えは句宮を目にした時に守夫人がその高貴さを既に珍しがっていたので、此处では其に倣うというという理屈っぽさがある語用に私には見える。

寄りゐたまへりつる真木柱も茵も(薫大将が寄り掛かっていらっしやったヒノキ柱にも座布団にも)、名残匂へる移り香(残り香が匂う移り香が)、言へばいとことさらめきたるまでありがたし(改めて言うのも今更ながら素晴らしい)。時々見たてまつる人だに(何度も押し申している女房でさえ)、たびごとにめできこゆ(その都度に感心申します)。

「経などを讀みて(お経を上げて善行を積み)、功德のすぐれたることあめるにも(功德の効験が現れるにしても)、香の香うばしきをやむごとなきことに(体臭が良いのを最上のことと)、仏のたまひおきけるも(仏様が仰って有るのも)、ことわりなりや(納得できます)。*薬王品などに(法華経の薬王菩薩の話などに)、取り分きてのたまへる(特にお書きなされている)、*牛頭梅檀とかや(牛頭香とか何とかは)、おどろおどろしきものの名なれど(ものものしい香料名だが)、まづかの殿の近く振る舞ひたまへば(とにかく大将殿が近くにいらっしやれば)、仏はまことしたまひけり(仏様は本当のことを仰っている)、とこそおぼゆれ(と分かります)。幼くおはしけるより(大将殿は御幼少時から)、行ひもいみじくしたまひければよ(念仏修行も熱心に為さっていたお蔭なのでしょうよ)」 *「薬王品(やくわうほん)」の「品」は仏法經典での巻をいう言い方らしい。「薬王」は大辞泉に「薬王菩薩」のこととしてく良薬を施与して人々の病苦をいやすという誓いを立てた菩薩。勇施(ゆせ)菩薩とともに法華経の持経者を保護する。薬上菩薩とともに釈迦(しゃか)の脇侍(きょうじ)とされる。また、二十五菩薩の一。>とある。理念化された薬師如来とは違って、実践の医師に近い存在だろうか。マ、どうせ分らないが。 *「牛頭梅檀(ごづせんだん)」はく南インドの牛頭山に産する梅檀から作った香料。麝香(じゃこう)のような芳香もち、万病を除くという。牛頭香。>と大辞泉にある。

など言ふもあり(など言う者もいます)。また(他には)、

「*前の世こそゆかしき御ありさまなれ(とてもそれだけのこととも思われず、前世での経緯が知りたくなる尊い御姿です)」 *「さきのよ」は不義の子である薫殿にとっては意味深だ。

など、口々めづることどもを(などと女房たちが口々にする大将殿の褒め言葉を)、すずろに笑みて聞きみたり(守夫人は心引かれて愉しそうに聞いていました)。

[第六段 浮舟の母、中君に娘を託す]

*君は(御方は守夫人に)、*忍びてのたまひつることを(薫大将がしみじみと仰った故姉君の縁者への恋情を)、*ほのめかしのたまふ(それとなく持ち出さします)。 *「きみ」と御方を呼ぶのは守夫人の目線での語り。 *「しのぶ」は此処では<隠れる>ではなく<恋慕う>だろう。 *「ほのめかす」は此処では<ほの(少し)>よりは<めかす(仕向ける)>に語意がある語用だろう。

「思ひ初めつること(大将は故君に抱き始めた恋心を)、執念きまで軽々しからずものしたまふめるを(執念深いほどいつまでも拘って、その縁者であるお嬢様へのお気持ちも軽々しいものではないと仰るものの)、げに(確かに女二の宮を娶りなされた)、ただ今のありさまなどを思へば(今現在の新婚早々という事情を思えば)、わづらはしき心地すべけれど(厚遇を期待するのは難しそうな気もしますが)、かの(先ほどあなたが仰った)世を背きても(いっそ出家した方が良いだろうか)、など思ひ寄りたまふらむも(などと御考え巡らしなさるのも)、同じことに思ひなして(決して最良の策ではないことに変わらないと見做して)、試みたまへかし(どうせなら栄えある大将との御縁を、お考えになってみたら如何ですか)」

とのたまへば(と御方が仰ると)、

「つらき目見せず(辛い目に遭わせず)、人にあなづられじの心にてこそ(世間から見下されないようにさせて遣りたいとの一心で)、*鳥の音聞こえざらむ住まひまで思ひたまへおきつれ(娘には鳥の鳴き声さえ聞こえないような深山暮らしをさせようかとまで考えておりました)。げに(しかし実際に)、人の御ありさまはひを見たてまつり思ひたまふるは(大将殿の御高貴さを押し申して存じますには)、下仕へのほどなどにて(下働きの身分であっても)、かかる人の御あたりに(あのような方の御側に)、馴れきこえむは(親しくお仕え申すことは)、かひありぬべし(張り合いが持てます)。 *「鳥の音聞こえざらむ住まひ」は注に『異本紫明抄』は「飛ぶ鳥の声も聞こえぬ奥山の深き心を人は知らなむ」(古今集恋一、五三五、読人しらず)を指摘。出家遁世の意。>とある。

まいて若き人は(私でさえそう思うのですから、まして年若い娘であってみれば)、心つけたてまつりぬべくはべるめれど(殿に心を寄せ申すだろうと存じられますが)、数ならぬ身に(受領家筋の我が娘の低い身分では)、もの思ふ種をやいとど蒔かせて見はべらむ(物思いの種をどんなにか多く蒔くことになるでしょう)。高きも短きも(身分が高くても低くても)、女といふものは、かかる筋にてこそ(女というものは、こういう男女の仲に付いて)、この世、後の世まで、苦しき身になりはべるなれ(この世ばかりか来世にまで苦しむものなのだろう)、と思ひたまへはべればなむ(と存じられますので)、*いとほしく思ひたまへはべる(不安の尽きない因果なものと思われまます)。それもただ御心になむ(ただ、それもあなた様の御考え次第です)。ともかくも(ともかくも娘を)、思し捨てず(お見捨てなさらず)、ものせさせたまへ(御世話下さい)」 *「いとほしく思

ひたまへはべる」は「女といふものは」という一般論の形を取っているので、単に娘のことだけではなく、守夫人自身や御方の事まで含んだ言い方なのだろう。だから、「それもただ御心になむ」が実に示唆に富んだ気の利いた台詞になっている、のだろう。

と聞こゆれば(と守夫人が部屋住みの苦労まで持ち出して、頼み申すので)、*いとわづらはしくなりて(御方は、我が身を顧みれば部屋住みの気苦労が実感されるので、この縁談の取り持ちが、とても重荷に思えて)、 *「いとわづらはしくなりて」は「それもただ御心になむ」と守夫人に言われたので、御方は自分の立場を再認識せざるを得なくなった、わけだ。つまり、下文は薫殿のことでもあり、匂宮のことでもある、という趣向。

「いさや(さて、どんなものでしょう)。来し方の心深さにうちとけて(今までの情け深さに気を許しても)、行く先のありさまは知りがたきを(これからの気持は分かりませんからねえ)」

とうち嘆きて(と嘆息して)、ことに物ものたまはずなりぬ(何も仰らなくなりました)。

明けぬれば(翌日の明け方になると)、車など率て来て(迎えの車を用意した常陸守邸の従者が)、守の消息など(守からの夫人の帰宅要請の伝言を)、いと腹立たしげに脅かしたれば(とても不満そうに急ぎ立てているように申して来たので)、

「かたじけなく(畏れ入りますが)、よろづに頼みきこえさせてなむ(万事宜しくお願いいたします)。なほ、しばし隠させたまひて(娘はもう少しお匿い頂いて)、*巖の中にとも(岩窟に籠もってでも)、いかにとも(どうしたものかと)、思ひたまへめぐらしはべるほど(思案申します間は)、数にはべらずとも(物の数にも入らない娘ですが)、思ほし放たず(お見捨てなく)、何ごとをも教へさせたまへ(何でもご指示下さいませ)」 *「いはほのなかにも」は注に<『異本紫明抄』は「いかならむ巖の中に住まばかは世の憂きことの聞こえ来ざらむ」(古今集雑下、九五二、読人しらず)を指摘。>とある。

など聞こえおきて(など守夫人は申し置いて)、*この御方も(当の娘御も)、いと心細く(母が居なくなるのは、とても心細く)、ならはぬ心地に(物慣れないので)、立ち離れむを思へど(自分も帰りたいと思うが)、今めかしくをかしく見ゆるあたりに(華やかで宮びなこの二条院に)、しばしも見馴れたてまつらむと思へば(少し馴染み申せると思うと)、さすがにうれしくもおぼえけり(それはそれで嬉しい気もしました)。 *「このおおんかた」は注に<浮舟。>とある。